

## 第3回交流学習会（報告） その2

第3回交流学習会（報告）

2007年12月26日（水）～28日（金）沖縄愛楽園にて

### ■ 入所者や退所者からの聞き取り

#### 1. 入所者 / ○○○ハルさん

報告：都築 寿美枝

今年90歳になられるハルさんの部屋にお邪魔する。看護師さんがトイレの世話をする間、廊下でしばし待つ。足の不自由なハルさんがベッドに腰掛けて私たちを迎えた。室内には娘さんやお孫さんの写真が飾られている。前夜あったばかりの私たちだが、訪問の趣旨を理解してくれたのか、ハルさんがこれまでの人生を語り始めた。

「私は八重山島の黒島出身、数えて90歳。12歳のころ〔ハンセン病の〕病気とわかったけど手足もどうもないから学校は出ていたわけ。そばの友達が『これはこんな〔ハンセン病の〕病気よ。』と言ったもんだから、みんなにばれて一人だけの席にされたよ。苦しくていやだったけど、国語が終わって、体操、掃除当番を終えてお家に帰ったよ。それからはもう学校に行かなかったよ。うちのお父さん商人だったよ。お客さんもたまに家に来るから、〔私を〕見られたら大変とって、小さい小屋にいたよ。お家に閉じ込められて泣くこともあったよ。22才のときにおまわりさんが来て『愛楽園に行きなさい。』といわれたよ。そこに入ったら二度と帰れないとわかってたから泣いたよ。家族も泣いて分かれたよ。小さいサバニ〔小型漁船〕に私一人を乗せて綱つけて別の船で引いていくわけ。石垣で30人くらい集められてここ〔愛楽園〕に来たよ。ここでは朝から晩まで奉仕作業。私は寮の寮長をした後、（重病患者の）付き添いをしたよ。精神病の女の人と同じ部屋で寝泊りして世話したよ。夜中にどっかに行くと言ったり、着物全部脱いでトイレに突っ込んだり、大変だったよ。私は戦でも付き添いしているよ。『空襲警報発令』と言ったら、ばあちゃんをおんぶして壕の中に入れてから、またこの25ぐらいになる目の見えない人をおんぶして。はだしでよ、何度も行ったりきたり。空襲で全部焼けて、あっちに風呂場が残ったよ。そこへ7、8人泊まったよ。じいちゃんたち男の人も何人かいたわけ。それからじいちゃんと二人になってから、子どもが生まれたわけ。昔、愛楽園は子ども産まざなかつたわけ。法律でよ。妊娠したと言ったらすぐ流産、男の人は筋切らすわけ。私のときは空襲で流産させる道具が全部焼けてしまったから、子どもが生まれたさ。同級生が7、8人いるさ。じいちゃんが読谷村に食べ物とりに行ってる間にお腹が痛くなって、誰もいないから草むらで『ん、ん』して一人で生んだわけ。子ども生まれたから、違反してると追い出されたわけよ。青木（恵哉）先生たちが昔住んでたジャルマ島に親子3人とあと二組の親子で住んだよ。水がないからサバニーで毎日水汲み、男たちはダイナマイトで魚とって近い部落の人に売って芋と換えて。8ヶ月してから園長が呼びに来て、園に戻ってテント生活。1、2年テントにいたけど暴風でテントが倒れて、子ども抱いて独身部屋に入ったよ。娘は2歳ごろ、親戚の人が勝手に連れて行ったの。それから姉の家で育てられたよ。私たちはそれからじいちゃんの故郷の西原に行ってサトウキビの皮むいで働いたよ。（戦時中に痛めた）不自由な手で鎌持ちきれんからすぐ包帯を巻きつけてからよ。じいちゃんも山羊飼って、野菜作って自転車で売りに。12年働いたけど私の目は順調じゃないし、じいちゃんも胃の病気で仕方なく、ここへ戻ってきたわけよ。娘に縁談があって、婿さんやむこうの家族が私の病気に理解があるので結婚式に行ったよ。私はうれしくて、不自由なこの手でカチューシ踊ったよ。」

3時から肩の温シップ治療に出かけるハルさんを看護師さんが迎えに来る。車椅子のハルさんが「またきつとおいでね。」と微笑む。（一部証言集から抜粋）

#### 2. 退所者 / Kさん

報告：A & 都築 勤

○1940年：島尻で生まれる。家族は祖父母、父母、兄4人と本人。

○1945年：アメリカの爆撃が始まると、家族全員が防空壕に隠れていた。そのとき艦砲射撃が壕を直撃、祖父母、父母を一瞬にして失った。神谷さんはたまたま横穴に入っていたので助かった。長兄の妻と一緒に逃げ回ったが、ついに捕虜となって終戦を迎えた。

○戦 後：長兄夫婦に育てられたが、やさしくはしてもらえなかった。小学校へは1年の時少し行っただけで、家事をやらされた。9歳の時には当時の女性がするすべての仕事をしていた。

○1950年：10歳のとき家を飛び出し、放浪生活を始めた。しかし収入の道はなく、盗みで飢えをしのいでいたところ、警察に捕まり戦争孤児収容施設に入所させられた。

○1953年：13歳のとき、収容施設の林間学校で泳いでいたとき、背中をくらげに刺された。手当してくれた先生が、背中に知覚のない所があるのを見つけて、すぐに愛楽園につれてきた。それが私の入所であった。

愛楽園へ入所できて助かった。園では園内での父母ができ、兄弟もできた。それに園外ではまだまだ食糧事情が厳しかったが、ここでは3度の食事を食べることができた。あまり勉強は好きでなかったので遊んでばかりいたが学校へも通うことができた。当時70～80人の子どもが園内の学校に通っていたと思う。

19歳のころ友達とギターとマンドリンとアコーディオンを演奏する「あざみ楽団」というグループをつくり、園内放送を使って演奏活動をしていた。さらに、職業訓練を受け私は運転免許証を、そして後に私の妻となる女性は裁縫の技術を身につけることができた。

○1961年：私たちは希望を胸いっぱい退所した。琉球政府は症状が軽微な患者は出所させる方針をとっていた。運転免許証があるので仕事はいくらでもあると思っていたが、運転免許証を見せるとどこの職場でも断われた。免許証の住所は園の住所だったのだ。差別の厳しさを痛感したがなすすべもなく、仕方なく土木作業員とか小さな店の売り子などを3年ほどした。3年後に二種免許を取得、住所も変えてタクシー会社に就職、以来40年間タクシー筋に仕事をしてきた。

○友の会など：後遺症が目立つところになかったこともあって直接的な差別はなかったが、タクシーを運転しているときに後ろの席でハンセン病の話題が出ると背中から冷や汗が流れた。

実家へは盆正月には帰るが、病気のことは話していない。知っているのか知らないのかわからないが、話題にしたことはない。

妻がゆうな協会（ゆうな藤楓センター内にある。旧称はハンセン病予防協会その後ゆうな藤楓協会）で働くようになってから、ときどき協会に入出入りするようになった。友の会はゆうな協会の2階にある。現在平良さんの後を継いで会長、2期目に入った。活動としては月1回集まっている。30名くらいが参加する。愛楽園の退所者は700～800名くらいいると思うが、給与金を受けているのは580名程度だときいている。

#### 3. 入所者 / 比嘉\*\*\*さん

「生まれたときから運がなかった」から「運が強かった」へ

報告：和田 静子 & B

比嘉さんの証言の冒頭は「私は生まれたときから運がなかったと思う」である。（証言集・第六章・第一節・家族の力「海も山も嵐も越えて」）11ページにわたる証言によると、幼時の養父母の虐待に始まり、ハンセン病と沖縄戦に翻弄された80余年は、まさに、この国この時代に生まれた不運、不幸を一身に引き受けたかのような苦難の連続だった。だから私は、この日のお話は「不運と苦難」の思い出に終始するものと予想した。

予想はずれた。お話は「私は運が強かった」から始まった。比嘉さんの記憶力は抜群で、年月も場所も場面も具体的である。最初に入所した敬愛園にたどり着く途中出会った大学生はバス代を払ってくれ、なべやきうどんをご馳走してくれた。神様だったのかもしれない。なくなった主人は16歳年長でやさしかった。現在の暮らしに何の不満もない。神様に感謝、教会の先生に感謝、愛楽園の職員に感謝、ご近所の皆さんに感謝、子供も孫や孫のお嫁さんに感謝、と。

これは本音だろうか。初めて会った客に不愉快な愚痴は聞かせられない、という苦勞人らしいやさしさと知恵の「もてなし」ではないか。

お部屋の鴨居には子供や孫、その連れ合いの写真額がずらりと14枚も掲げられている。「みんなやさしい。しょっちゅう訪ねてくれる」という。では、せっかく社会復帰するのに再入所したのはなぜか。「主人に楽をさせたかった、子供に迷惑をかけたくないから」と言われるが、疑念は残る。が、その奥に踏み込んで聞くことはできない。想像するばかりである。

比嘉さん宅に案内してくださったのは、証言集の聞き取り調査員で、比嘉さんを担当した吉川由紀さんである。おそらく何回も足を運んで「涙を流しながら話を聞いてくれた」吉川さんに八十余年のうらみつらみのすべてを吐き出したことで、比嘉さんは「生まれたときから運が悪かった」から「運が強かった」に変わられたのだろう。これは証言集発刊の確実な成果の一つだと思いたい。

証言せずになくなった方、証言を拒否された方、聞き取りはしたが文字にすることはできなかった証言等々に思いを馳せるとき、証言集が差別と偏見の根絶に結びつくのは道遠しの感否めない。

証言集発刊にいたるまでのご苦勞を推察し、見事な結末に感謝すると同時に、これの活用を根気強く継続されることを期待する。私も何かしたいと思う。

#### 4. 退所者 / 平良仁雄さん

## ○幼い頃の記憶

私は1939（昭和14）年に、那覇から飛行機で30分くらいに位置している久米島で生まれました。7人兄弟姉妹で男は私一人だったので、両親は兄弟姉妹の誰よりもかわいがっていたように思います。

自分がいつ、ハンセン病に感染したのかはわかりません。私は戦後の1948（昭和23）年、9歳の時に沖縄愛楽園に送られてきました。それまでの記憶は定かではありません。小学校にどのように通っていたのか、通っていなかったのか、どんな友だちがいたのかといったことをほとんど覚えていません。それはなぜかという、沖縄の言葉で「ヤーグマイ（閉じこもる）」というのですが、家に来客があれば奥の部屋に引っ込んでじっとがまんして、客が帰るとまた部屋に戻ってくるといった生活をしていたからだと思います。ですから、記憶の中に、小学校に行ったり、友だちと遊んだりといった記憶がないのです。本当に寂しい思いをしていたんだと思います。

## ○強制収容

療養所へは強制収容でした。船に乗せられたのは、港ではなく、海岸崖を下りたところで、船は米軍の軍用船のようでした。愛楽園の医者と看護婦がいっしょだったと記憶しています。船にはいると子どもは私一人で、乗船していた大人からかわいがられたことを今でも覚えています。療養所から迎えにきていた看護婦さんが賛美歌を歌って慰めてくれました。海まで送ってくれた父の姿が今でも浮かんでくることがあります。

療養所に着いたのが12月26日、ちょうどクリスマスの翌日でした。療養所に着いたら、同年代の子どもたちがいっぱい出迎えてくれて本当にうれしかったですね。療養所では大人の入所者にもかわいがっていただき、学校生活も送り、楽しい時間を過ごさせてもらいました。でも、時に、波打ち際に立って、水平線を見ながら、家族や両親のことを思い出したりしていました。ですからやはり、決して楽しいことばかりではなかったと思います。

## ○澄井小学校中学校時代

私も愛楽園内に設立されていた澄井小学校と中学校で学びましたが、教科書は自治会がつくったものだったんじゃないかと思います。患者教師もいましたが、それ以外の教師は他の職員と同じように予防着姿で、白い帽子に長靴を履いていましたが、職員がみんなそんな格好だったので、不思議には感じていませんでした。

## ○退所、そして再入所

私は19歳の時に愛楽園を退所（社会復帰）しました。両親は、私が一人息子だったので、退所して帰ってきてほしいという思いがあったと思いますし、自分も兄弟姉妹や両親といっしょに生活したいという思いがあって退所しました。そして結婚しました。子どもにも恵まれました。タクシーの運転手などの職を得て必死に家族を養いました。

しかし、病気を再発し、再入所をせざるをえませんでした。妻は子どもたちを連れて時々、愛楽園に来てくれていました。再入所の間、妻や子どもに本当に辛い思いをさせました。その時のことは、思い出すのも重たすぎて、なかなか人には話すことができません。

1999（平成11）年に再び退所しましたが、元愛楽園長の犀川一夫先生が、那覇市内で外来治療を行ってくださっていたので、病歴を隠さなくていいので、安心して通うことができました。

## ○退所した者の悩み

わたしたちは、皮膚の感覚がないとか、足に裏傷があるとか、さまざまなハンセン病の後遺症を持っているわけです。例えば、足の裏傷が悪化して、リンパ腺が腫れて病院に行きたいなあと思うけれども、この傷のことは、ハンセン病の専門医じゃないとわからない。絶対隔離を前提として療養所が運営されてきたので、ハンセン病の専門医は療養所にしかないから、一般の病院ではわからないのです。一般の病院に行けば、過去にハンセン病にかかっていたということがばれるんじゃないかという心配があって、退所すると、なかなか病院には行けないのです。ひどい場合は、足を切断される寸前にならないと一般の病院には行けなかったのです。いつになったら、わたしたちハンセン病の回復者が社会の一般の病院に安心して行くことができるのかなあ、と思っています。

## ○療養所でも安心して治療が受けられるように開放してほしい

長い間隔離されていた療養所は、医療の不備など問題はあるかもしれないけど、わたしたちにとっては、長い間家族づきあいしてきた仲間がたくさんいるので、「第二のふるさと」でもあるわけです。しかし、現行制度（法律）上、療養所で入院治療を受けたら、再入所と見なされる場合も生じ、その結果、その後に退所した時には、退所者給与金が減額させられたり停止されるおそれがあるので（そう簡単には療養所でも治療が受けられないので）、安心して社会生活を送ることができないのです。ですから、自分の行きたい病院のひとつとして療養所が開放されたら大変うれしいなと思っています。

## ○犀川一夫先生

7月（07年）にお亡くなりになった犀川先生は恩人です。犀川先生はあの国賠訴訟を勝訴に導く証言をしてくださった方ですが、一貫して絶対隔離に反対されました。わたしたち愛楽園に入所歴がある者にとっては、治療だけでなく、社会復帰も後押ししてくださいました。社会復帰後の生活もずっと気にかけて、励ましてくださいました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

## ○一般の病院で安心して治療し、入院が保障されるようになってほしい

退所者や「家族の会」の仲間たちの中で、自分や自分の家族がハンセン病でしたと堂々と生きていく人が何人いるか。ほとんどの場合、病気のことを隠して生きていくわけです。病気にかかっていた自分は病歴を話す覚悟はできているけれども、家族が反対するといった事例はいっぱいあるのです。

そんな状態ですから、退所者は、社会の日常生活の中で、自分が何らかの病気になって、病院に行って、かつてハンセン病を患っていたということがばれるんじゃないかということが一番の心配事なんです。ですから、われわれ退所者の誰もが、健康保険手帳を使って、療養所でも安心して診療が受けられ、治療も受けられ、入院までできる制度が早くできてほしいと思っています。みなさんのご理解とご支援をお願いいたします。